

狩人様に愛されすぎてツライ(仮)

ムシファエル

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自分が思う可愛い狩人を書いてみたかっただけ。続かない↑  
あまりにもおかしな部分が有れば教えてもらえれば嬉しいです。

目次

①	1
聖杯ダンジョンの話	4

①

微かに臭うアルコールの匂いと錆びた鉄の匂い、そして背中に感じる鉄の冷たく、硬い感触。

遠くで甲高い女の叫びのような、もしくは獣の叫び声が鼓膜に届く。

意識が戻ってから何時間経っだろうか。

現実逃避の様に、いやまあ現実逃避しようと思つたフリを続け、もしくはそのまま気絶するように寝て目を覚ましてもこの冷たい鉄のベットの感触は変わることがなかった。

気分是最悪、この部屋の壁や天井の飛び散った血を見るだけでも何も入ってないはずの胃から何か逆流しそうなぐらいは。

極めつけは右手を握る誰かの感触。

視線を右に移せばフードを目深く被る人物が両手で俺の手を包んでいる。

フードの隙間から銀色の細かい髪が流れ落ちているのと、胸の部分に当たる胸部がふっくらと膨らんでいる所を見るに女性だと伺える。しかもフードから時折除く顔は十中八九美女と言える顔である。

ここだけでどんな展開だよとドキドキするが残念ながら俺はドキドキしなかった。なんなら違う意味で鼓動がドキドキしてる。

確かに可愛いし胸もそこそこ大きい娘に右手を大事そうに握られたら嬉しいが如何せん服に問題があった。

服が致命的にダサイと言う訳では無い。なんなら男心にくすぐられるほどめっちゃくちやカツコイイと賞賛できる。

返り血が着いてなければの話だが。

目が覚めた時にこの部屋の惨状を見て誘拐されたと思いつぐさま起き上がろうとすると右手を握られており、更に右手を握っているのはこの部屋を拷問か何かで汚した張本人が血塗れで寝ている。

頭がパンクした。本当に考えることが出来なくなった。

よくB級映画ではこんな時に悲鳴を上げるのが大半だがこの

時のオレは声すら出すことが出来なかった。

だが運のいいことに誘拐犯？はぐつすりと眠っているチャンスとばかりに右手を振り払おうとしたがビクともしない。

何度か振り回してもがうちりと恋人繋ぎで繋がれた手は離れない。

今度は両手を使い誘拐犯の人差し指を掴もうとしたがまるで接着剤でもついているのかビクともしない。

その後は3〜40分ぐらい人差し指と格闘したが動かすことは叶わなかった。

最初に戻るが指を動かすことすら出来ず俺がクソ雑魚ナメクジなのか相手が異常なのかは考えなくても後半だろう。

声を掛けようにも血濡れの姿を見ただけで喉がひきつるし、なんならこのまま寝てて欲しい。

最悪の場合を考えて逃げられるように、もしくは何か武器になるものを探すべく上半身を起こし視線を手の届く範囲を見渡すと直ぐに武器になりそうなものを見つけた。

いや、なりそうなものじゃなくて確実に誰が見ても武器と言える銀色の剣が頭だけの獣に突き刺さっていた。

天井や壁にこびり付く血と隣にいる血塗れの美女の印象が大きかったのか分からないが、よくよく見ると床には血溜まりの中に原型をほぼ失っている獣が多かった。

「…守ってくれたのか？」

口に出してみたがいまいち納得がいかない。

それでも（たぶん）守ってくれたという可能性があるだけで心に余裕が出来てきた。

心に余裕が出てくるとふとこの部屋に既視感を感じる。

隣にいる美女をもう一度見る。その服装にも見覚えがある。血塗れで、更に部屋も薄暗く、目を凝らさなければならぬがそれでもこの服の名前を思い出した。

「ヤーナムの…狩装束…」

身体中の血の気が引いた。

これがドツキリの類かと思ったがあまりにもこの部屋の惨状はリアルで、クラクラするほどの血の匂いがその説を否定する。

心臓の音が破裂するんじゃないかと思うぐらい大きく耳に響く。

心臓を左手で押さえつけて鼓動の速さを鎮めようと体制を変えた時、すぐ側に点滴台が視界に映り、それを見るとまだ中に液体が残りその管が今俺が寝ているところまで伸びていた。

すぐに体を起こし両腕を確認する。腕を隅々まで観察し、針の後がないか確認するとどつと体が重くなる。

(良かった、何もされてない…神経質になりすぎか?)

「目が覚めたのですか？」

「ぴよお」

顔を横に、錆び付いた機械を無理やり動かしたように左に向けるど…

「ああ…このまま目覚めないのかと心配しました、わたしの主よ」

血塗れの美女が笑顔でそう言った。

## 聖杯ダンジョンの話

「主は聖杯ダンジョンに興味はありますか？」

「聖杯ダンジョン？ ヤーナムの街にそんなものあったっけ？」

貫通銃の銃身を布切れで磨いていると灰色三つ編み髪が特徴の狩人こと『グレイ』が右手に赤い謎の液体溢れる赤ん坊の姿をした、小さいなにかを握りしめながら興奮気味に話しかけてくる。

その手にある赤ん坊に顔を顰めながら、貫通銃をテーブルに置き、体をぐるっとグレイに向ける。

「いえ、ヤーナムではなくすぐそこにある墓石にこの聖杯とある素材を備えれば行けるそうです！」

赤い赤ん坊に気を取られていたのか片方の手に持つている綺麗な杯に気づかず、今更ながらに視線をもうひとつの聖杯とやらの目を向けると金色の杯に色々な宝石を取り付けた高そうな杯があった。

「…その聖杯って確か旧市街の方にあつたやつ？」

「さすが主！ あの後どこからか現れた黒フード被った変な同業者にこれの使い方を聞いたのです」

「変な人？」

「それがよく分からなくて…突然ふらつと現れて早口にこれの説明とあとこの素材を渡されたあと何かブツブツ言いながら消えてしまつて…」

よく分からないがそれは大丈夫なものなのか？、とは今更か…何処も彼処も獣や変態狩人だらけで今更何が起きようと別段不思議じゃない気がする。

しかし聖杯ダンジョンって言うからにはお宝とかが眠っているのだろうか？ トレジャーハンターならともかく獣狩りを生業とする狩人達には不必要な気がするが…。

でも少し興味もあるし見てみようかな。しかしながら最近は好奇心が強くなった気がするな…好奇心は猫を殺すってことわざもあるし気おつけよう。

グレイに見てみるだけ見ると伝えて先に行かせ、貫通銃を背中に

背負い、鴉さんに咽び泣いて貸してもらった紋章を使い、水盆の使者から（グレイに）買って貰った慈悲の刃を腰に着け、最後に水銀弾の確認をして館をでた。

いつも思うが輸血液を使えるグレイが羨ましい。なぜなら俺は輸血液を使うことは出来ないからだ。

一度実験として小皿の上で試して見せてもらったが、狩人の血と輸血液の血を足すと狩人の血が輸血液を勢いよく飲み込むというなんとも言えない怪奇現象が起こるが俺の場合だと反対でまず輸血液に混ざることはない。

幾ら輸血液と俺の血を皿の上で混ぜてもすぐに水と油のように弾かれてしまう。

結果的に俺には回復手段が消えてしまったがいいこともある。

俺の血はどうやらとても血質がいいらしい。それもそこいらにいる聖女の何十倍も良いとグレイに言われたことがある。

普通に水銀弾を用いた散弾銃でそこいらにある獣を打てば一撃で葬り去ることが出来るぐらいは。

ただし当たればの話ではある。

しかも欠点もある。

それは威力が強すぎて連射出来ないのだ。短銃でさえ腕が真上に弾かれるぐらいは強い。

一度グレイに剣と銃が重なった仕掛け武器『レイテルパラツシュ』という武器で試し打ちをした所、一発打っただけでお釈迦になつてしまったこともある。そして俺はその打った衝撃で転んでしまい、後頭部を強打した。

今では多少なりともマシンに打てるようになり、連射が元々効かない貫通銃の一撃必殺の切り札兼援護射撃と近づかれた時用の慈悲の刃で落ち着いている。

深く墓暴きのフードを被り、こちらに向かって満面の笑みを浮かべ手を振るグレイへと小走りに向かう。

元々この狩人の夢はそんなに広くないので数秒でグレイの元に



着く。

グレイのすぐ側にある墓石には既に聖杯が設置されており、そして何故か水盆の使者が群がっていた。

「主よ、もうすぐにもダンジョンに入ることが出来ますよ。まずは私が先に行つて鐘を鳴らすので主はここから鈴を鳴らして下さい」

そういうや否、グレイは水盆の使者に手を伸ばすとその身体は光輝き消えてしまった。慌てて聖杯に手を伸ばそうとすると水盆の使者に手を叩き落とされ、腰あたりを指先される。ちゃんと鈴を使えと言っているのだろう。

水盆の使者に少し悪態をつけながらすぐに腰にしまっていた鈴を鳴らしてグレイに呼び出されるのを待とうとするがすぐに鐘との共鳴が確認され視界が青白い光で埋まった。